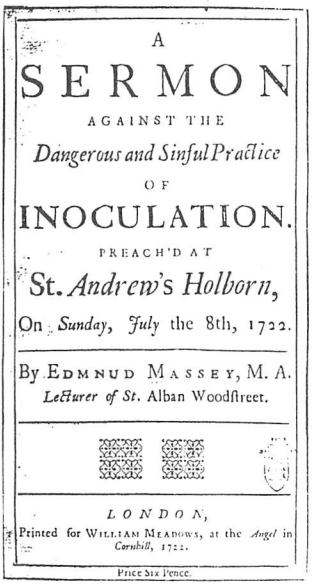
人痘接種法に反対したイギリスの牧師マッセイの説教

小田泰子

イギリスでは一七二一年から、外科医チャールズ・メートランド（Maitland, Charles 1668-1748）らにより天然痘予防に有効な手段として人痘接種が行われた。メートランドが行った人痘接種については『日本医史学雑誌』に報告した。[1] この人痘接種に反対して、一七二二年に牧師エドモンド・マッセイ（Massey, Edmond 生没年不詳）が説教を行った。マッセイが人痘接種に反対する説教を行ったことは古賀十二郎、[2] エドガー・クルークシャンク（Crookshank, M. Edgar 1868-1928）[3] らが言及してはいるが、説教の内容はこれまで不明であった。マッセイの行った説教をイエール大学医学図書館で見出したのでそれを全訳した。

マッセイは旧約聖書の受難の人とされるヨブを例にとり、聖書の言葉を引用して人痘接種に反対を唱えた。この説教を読むと当時の人々が病気というものをどのように理解していたか、また、なぜ教会が人痘接種法に反対したか、を知ることができる。また、マッセイの反対論は新しい医学―出生前遺伝子診断・臓器移植・安楽死・クローン動物の誕生など―の導入に際して現在でもなされている論争のプロトタイプであると考える。このように強く反対された人痘接種法ではあったが、「神は人間によいことを望むであろう」という意見が優勢になり、人痘接種法、ついでジェンナーの牛痘法も受け入れられ、WHOによる天然痘撲滅の成功となったことは知られているとおりである。医学は神の領分と抵触する部分の多い学問分野であるが、神と人との領分は時とともに変わることを知る。

マッセイの説教の表紙を示す。縦二四センチ、横一二センチ、三〇ページの冊子である。下方に六ペンスと印刷されていることから販売されたと推定される。マッセイの経歴などは不明であるが、この表紙から聖アルバンウッドストリート教会の説教師で、この説教は一七二二年七月八日（日曜日）にセントアンドリュースのホルボン教会で行われたことが分かる。


A
SERMON
AGAINST THE
Dangerous and Sinful Practice
OF
INOCULATION.
PREACH'D AT
St. *Andrew's Holborn*,
On *Sunday*, *July* the 8th, 1722.
By EDMNUD MASSEY, M. A.
Lecturer of St. Alban Woodstreet.
LONDON,
Printed for WILLIAM MEADOWS, at the *Angel* in *Cornhill*, 1722.
Price Six Pence.

マッセイ『危険で罪深い人痘法に反対する説教』[4][5]（全訳）

人類の敵（悪魔）が最初に聖なるヨブの命（Person）を奪わないで、忠誠と忍耐を試すことを許されました。悪魔がヨブに対して行った彼の財産を奪い、その子供を殺すということは、生きている人間にとっては最高の不幸であると私は考えます。そのようなことは人間にとっての最高の苦悩で、人間が耐えられる限界です。

このようにして我々の英雄ヨブは財産を失い、子供に死なれ、裕福な身分から乞食になりました。友人・知人も彼から離れて行きました。「慈しみを示し続ける者もいなくなり、みなしごとなった彼の子らを、憐れむ者もなくなるように」（詩編109. 12）

それでもヨブは苦悩に耐えました。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（ヨブ記1. 21）

この偉大なる人ヨブを突然襲った災厄は、神がその保護をやめると我々人間はなす術もなくなることを示すものです。力・富・評判も神の御心の同意なしでは安全ではありません。神はたびたびその子を見捨てることなく苦しめてきました。このことは聖書にあります。「不毛、災厄、嘆きによって、彼らは減って行き、屈み込んだ」（詩編107. 39）。しかし、「このような時にも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった」（ヨブ記1. 22）。ヨブは忍耐強く、辛抱強く神に従いました。神は、我々にこの国と力は誰のものかを問われたのです。だから、我々はそのような場合にも忍耐強くあらねばなりません。

悪魔の最初の試みはこのように失敗しました。聖なる男ヨブの誠実さは悪魔が考えていたよりもしっかりした基盤の上に確立されていたのです。次に悪魔はヨブが卑しい精神を持っていることを神にほのめかしました。悪魔は神に言いました。「手を伸ばして彼の骨と肉に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません」（ヨブ記2. 5）。すなわち、ヨブを痛みのある、回復の見込みのない急性の疾患に罹らせました。ヨブの偽善的行為は自ずから正体を現すでしょう。そして、ヨブは神に対して持っていたかのように振る舞っていた尊敬をかなぐり捨てて、おおっぴらに神意を糾弾し、神を冒瀆するでしょう。このことをほのめかして悪魔は二度目の試みをする許しを得ました。すなわちヨブの身体に痛みのある腫れ物ができ、健康が損なわれました。ヨブはこの試みにも負けませんでした。

この悪魔の行為は神によって限定されており、この善良な人の命は保証されていました。しかし、そのことをヨブは知りませんでした。「主はサタンに言われた。それでは、彼をお前のよいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな」（ヨブ記2. 6）

悪魔はいつもの通り一度負けても新しい力を加えて襲ってきました。誘惑は波のように次々とヨブを襲いました。そし

て、一般には最後の波が一番強く、一番遠くへ連れていくものです。ヨブは世俗的な財産を奪われ、子供に死なれました。そして、それよりつらいことには病気になり、生きながら埋められるような目にあいました。「サタンは主の前から出ていった。サタンはヨブに手を下し、頭のてっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた」（ヨブ記2.7）。すなわち、痛みのある、不快な病気に罹りました。その病気は彼を社会から追い出し、彼が持っていた評判をも奪いました。

聖書には悪魔がヨブに与えたこの病気が何であったかは書かれていません。それで、私は、悪魔がヨブの身体に何か毒を入れ、その毒がヨブの血を発酵させたために、彼の身体全体、頭の先から足の裏まで膿疱で覆われることになった、と考えます。すなわち、ヨブの病気は今多くの人が試みようとしている人痘接種法のようなことが彼に行われたためであると私は考えます。私はこの推定が正しいかどうか分かりません。しかし、このようなことが昔からこの世にあったと考えるのは筋道の通った考えではないでしょうか。

悪魔がヨブにした悪魔への誠実を誓わせ、全能の神への信頼と忠誠を捨てさせようとするこの試みは前と同様に失敗しました。ヨブは常に神に服従しました。ファラオの疑問「主とは一体何者なのか。どうして、その言うことをわたしが聞いて、イスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主など知らないし、イスラエルを去らせはしない」（出エジプト記5.2）と比較してください。ファラオの不幸は不信心に根ざしています。

なぜこれらの悪魔の試みが失敗したのかは追求するに値します。主は次の二つの点をしっかりと考慮されたに違いありません。

第一に、なぜ人間は病気になるのでしょう。

第二に、人々を悩ます力を持つのはだれでしょう。

まず、「なぜ人間は病気になるのでしょう」について考えてみましょう。

私はそれには原則的に二つの理由があると考えます。その第一は、我々の神への忠誠を試すためであり、第二は、我々の犯した罪を罰するためです。

一般に人間は無知で、欺かれやすいものです。人間の愛と情熱はこんぐらがっており、理論的な動機に根ざしていないことがしばしばです。多くの人の場合には、その人の宗教は生まれた国によって決まるという完全に偶発的なものです。人々は宗教を、戦いの日にエフライムの子供たちがどのように使うかも知らないで弓矢を持ったように持つのです。「エフライムの子らは武装し弓を射るものであったが、戦いの日に、裏切った」（詩編78.9）。戦いの日というのは宗教的には我々に降りかかるさまざまの苦悩を意味し、一般的にはいろいろの病気や死となって我々を襲います。神は信心深い人を訪れ、その人を他の人の指針にしようとします。

「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなた方の立派な行いを見て、あなた方の天の父を

あがめるようになるためである」（マタイによる福音書5.16）。さらに、聖書には「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか」（エレミヤ書17.9）とあります。善が報いられないことがあるように悪も正されないことがあります。多くの悪は我々の間に隠れています。使徒は言います、「わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい」（ヤコブの手紙1.2）。すなわち、善良な人々はさまざまな不利益を被りながらも神の規律に従って行動します。ヨセフもそのような人でした。主は「ヨセフを捕らえて、主の囚人をつなぐ監獄に入れた。ヨセフはこうして監獄にいた」（創世記39.20）。ダニエルも神のいない世界に生きるよりも、三〇日間、悪のない世界を選びました。「それで、王は命令を下し、ダニエルは獅子の洞窟に投げ込まれることになって引き出された。王は彼に言った。お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるように」（ダニエル6.17）。同様に、ヨブも恐ろしい病気にかかりましたが高潔にとどまりました。「断じて、あなたたちを正しいとはしない。死にいたるまで、わたしは潔白を主張する」（ヨブ記27.5）。結局、ヨブの誠実さをためす試みは彼の偉大さを明らかにしただけでした。

第二の点、「病気は我々の誠実さを試すのでなければ、我々の犯した罪を罰するために送られる」について。

世の中には悪があります。もし、人の悪しき心が譴責されることがなければ、この世はより悪くなります。ヨハネの手紙に「何事でも神の御心に叶うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れて下さる。これが神にたいするわたしたちの確信です」（ヨハネの手紙一5.14）とあります。そして、ヨブはすでに三八年間病気で罰せられてきました。聖パウロもまた、コリント信徒の神を冒瀆する行為に対して、「そのため、あなたがたの間に弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだのです」（コリントの信徒への手紙一11.30）と、なぜ多くの人が病気になるのかの理由を知らせています。これらの例から、我々の教会は病気になって病床で悩んでいる人に忠告します。なぜ悪魔が彼らのところにやってきたのかをよく考えなさい。それはその人の忍耐を試すためと、神の日に忠節を見いだすためです。神を讃えましょう。神が「人の子らを苦しめ悩ますことがあっても、それが御心なのではない」（哀歌3.33）と聖書にあります。人は悪しき行いを正すために病むのですから、そのように病み、悩むことを喜びましょう。そして、それに従いましょう。

神はヘロデにしたように直ちにはっきりとしたやり方で罪を罰することがあります。「するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた」（使徒言行録12.23）。一方、その罪の程度によってふさわしいやり方で罰します。習慣的な飲酒や姦淫は健康を害し、財産を減らし、老齢の不調をもたらします。病気は過去に犯した我々の罪の当然の帰結ですが、ありがたいことに将来の病気を防ぐための神の意図でも

あります。少し反省をすれば悪い結果を恐れて誘惑を避け、よりよい行いをすることになります。ある者は牢獄を恐れて正直になり、感染を恐れて貞節にとどまります。多くの人は人格をおとしめるのを恐れ、ある者は地獄に落ちるのを恐れて宗教的になるのは疑いありません。反省をすることで我々は道徳的になるのです。

もし、これらの拘束がすべて取り去られ、罰を受ける恐れがなくなったら、人々が来世を信じなくなったら、混乱はさらにひどくなります。ですから、全能の神を讃えましょう。このような制約がなくなったら、世の中は現在よりも生きるのに快適な場所ではなくなるでしょう。このことから次の疑問が生まれます。

第二の「我々を病気で悩ます力を持つ者は誰か」について考えましょう。

聖書にはヨブは悪魔によって病気にされたと書いてあります。しかし、その前の節を読みますと、悪魔の力は全能の神によって与えられ、制限されていたことが分かります。

人が人を病気にすることは、キリスト教の教えには全く叶っていません。人痘接種は人々の理解を誤らせると同時に宗教を侮辱するものです。神が正しいのであれば人痘法の基礎は無知であり、その効果は推定にしかすぎません。

聖書にはしばしば神が人の病気を治したことが書かれています。神の祝福は今も続いています。エジプトにおけるモーゼの例「二人はかまどのすすをとってファラオの前に立ち、モーゼがそれを天に向かってまき散らした。すると、膿の出るはれ物が人と家畜に生じた」（出エジプト記9.10）と、ゲハジのエリシャの例『ナマアンの重い皮膚病がお前とお前の子孫にいつまでもまといつくことになるのに。』ゲハジは重い皮膚病で雪のようになり、エリシャの前から立ち去った」（列王記下5.27）を取り上げます。この二つの例は奇跡です。神の意志によって直ちに神聖冒瀆と姦淫の罪が罰せられたのです。これまで、主によらずに病気になり、熱のために床に病むように宣告されたことはありません。しかし、これが現在の一群の医師が当然のこととして行っていることなのです。

このようなことは不正であることは確かです。病気は前に述べたように、我々の神への信頼を試し、我々が犯した罪を罰するために神が与えるものです。我々を悩ます力を持つのは神のみです。

わたしはこの神の領域を侵害する悪魔的な術に疑念を呈そうというのではありません。この術そのものが神意をこの世から追い出そうとするものであり、悪と不道徳を推進すると言っているのです。

結局、わたしは次のように考えます。

一、体の力は道徳的な力を意味しません。すなわち、人はその力があるから、手が届くからといって道徳のことを考えずに物事を行うのは正しくありません。不法な行為は避けなければなりません。使徒は忠告しています。「ですから、あなたがたにとって善いことがそしりの種にならないようにしな

さい」（ローマの信徒への手紙14.16）と。このことは結果がよいからといって許されない行為をしてはいけないということです。よい意図があっても神の掟に照らして正しいとは限りません。ある行為が正しいためにはすべてが神の掟に叶っていることが必要です。使徒はよい結果をもたらすものであっても悪をなすことを禁じています。「それに、それは善を生じるために悪をしようともいえるのではないでしょうか。わたしたちがこう主張していると中傷する人々がいますが、こういう者たちが罰を受けるのは当然です」（ローマ信徒への手紙3.8）。このことは、掟に叶っていないすべての術は、それが病気に有効であっても禁ぜられたということです。そのような実験を行うのは、それが道徳的に確実になるまで禁止するべきです。

使徒は「確信に基づいていないことは、すべて罪なのです」（ローマ信徒への手紙14.23）と言いました。ヨブは彼の体によいことでも罪を犯すことを恐れて拒否しました。もし、ヨブがその治療を受け入れたら痛みから逃れられたかも知れません。しかし、治療は病気よりもさらにひどかったことでしょう。愚かな施術者が与える治療を受けた不幸な患者にひどい神意がもたらされたことでしょう。

二、基本的な自然の法則を探している善良な人は、わたしが反対している予防方法を喜んで受入れようとするでしょう。これまでこの術がどのように理解され推進されてきたかを知ると、わたしが負けつつあることを告白せざるをえません。しかし、この術で天然痘に罹るよりも多くの人が死亡しているという告白があります。これはヨブが「あなたたちは皆、偽りの薬を塗る役に立たない医者だ」（ヨブ記13.4）と言っているような医者です。彼らは人痘接種法は将来の天然痘感染の危険から安全にする術であると言っていますが、そのようなことは知りえないことです。

このような術を行う医師は「主の前に集まった悪魔」（ヨブ記2.1）と同じです。人を病気にさせる医師は大学から追い出されるでしょう。彼らはソロモンが言う売春婦に等しいのです。「やがて、矢が肝臓を貫くであろう。彼は罠にかかる鳥よりもたやすく自分の欲望の罠にかかったことを知らない」（箴言7.23）。さらに一生罹らないかも知れない危険な病気に無理に罹らせることが人間の命を保証することになるとは理解できません。天然痘はもし罹ったとしても少しの不便を凌げばよいだけです。また、将来の感染から安全になるとは理解できません。この方法は人間を本当は危険にさらさせる方法です。

三、わたしはこの方法は聖書の第六の戒律（筆者注 殺すなかれ）で禁止されており、挑発的と言う意味で第七の戒律（筆者注 姦淫するなかれ）にも抵触する、と考えます。神は人の命を奪うことを禁じたときに、同時に暴力をも否定されました。この術も同様です。

聖書には「主を試してはならない」（申命記6.16）と書かれています。これは悪魔に対する主の答えです。人痘法と悪魔

の誘惑とには大きな差はありません。両者とも術の安全性を言い、神を讃えるふりをしていますが、神の保護を期待して、不必要な危険と困難に身をさらしてはいけません。神は我々を試練に遭わせるときには「試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」（コリント信徒への手紙一 10.13）。しかし、誘惑に負けてわざわざ病気に罹るのであれば、もはや、神の祝福を期待することはできません。

このごろの人はあまりにも自分自身に頼りすぎ、神の助けを願いません。そのことは「折れかけの葦の杖を頼りにしている」（イザヤ書 36.6）ようなものです。「それは寄りかかる者の手を刺し貫くだけです」（同上）。

医師は人の健康を回復させ、命をながらえさせるときにのみ讃えられます。我々の最初の父であると同時に最初の医師であるアダムは彼の罪によって命の樹を取り上げられました。それが、人生がこのように短く不確かになった理由です。しかし、彼のもつ知識は神から与えられたのです。「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父からくるのです」（ヤコブの手紙 1.17）。そして、このことを反省しながら知識を使わなければなりません。

最後に、この新しい医術は悪と不道徳を推進するものです。病気の中でも、天然痘ほど世界中で恐れられている病気はありません。この奇妙な方法・人痘接種法は天然痘から逃れさせるようにみえます。しかし、幸いにもその術に対する恐れが人々をそれから遠ざけています。主の御使いがバラムを危険から遠ざけたように。「主はこのとき、バラムの目を開かれた。彼は主の御使いが抜き身の剣を手にして、道に立ちふさがっているのを見た。彼は身をかがめてひれ伏した」（民数記 22.31）。我々が罪を犯し身を破滅させることから、神が守って下さっていることを感謝とともによく考えなければなりません。大胆な医者はこの病気の厳しさを減らすことができるかも知れません。彼らは人をこの病気から安全にすることができるかも知れません。全能の神が波に「ここまで来てもよいが越えてはならない」（ヨブ記 38.11）と言ったように、この病気に対して言うことができるかも知れません。しかし、これは本当の親切なのでしょうか。人間をより健康にするかも知れませんが、正しい行いではありません。

もし、安全であるということで、人々が欲望に身をまかせ、神への感謝・慈悲を頼りにしなければ、結局はよい結果を招かないでしょう。危険が除かれたら守りを緩め、多くの罪を犯すことになります。ある人は生まれてすぐ死に、ある人は幼いうちに死にます。これらの死には神の意図があることは確かです。我々は厳しい冬や悪い天候を過ごすように、神が与えた現在の状態を耐えるべきです。神がそのように命令し約束されたからです。

さて、我々はダビデが「大変な苦しみだ。主の御手にかかって倒れよう。主の慈悲は大きい。人間の手にはかかりたくない」（サムエル記 24.14）と言ったように、愚かな下手な人間の手にかかるべきではありません。もし、我々がこの世を創

り給い、我々を導き、支配している神を信じ、「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからである」（ペトロの手紙5.7）と考え、神が「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」（マタイによる福音書10.30）のを知っているのであれば、神のお許しがなくてはどんな些細なこともしてはならないことは当然です。使徒の疑問「それとも、主にねたみを起こさせるつもりなのですか。わたしたちは、主より強い者でしょうか」（コリントの信徒への手紙一10.22）を繰り返します。我々は主をライバルと見なし、主の采配に欠点を探そうとするのでしょうか。主から仕事を奪い、自分で采配しようとするのでしょうか。なんと危険な実験でしょう。主よりも賢く、強くあるふりをして罰を受けないはずはありません。この世のことをすべて知っていられる主は、人々をいつ、どのような試みにあわせるかを知っておられます。どのようなことも主の許しなく行うことは、それが最終的には許されることであっても罪になります。

主を信じない無神論者、神の支配を非難する者、神の掟に従わない者をして人痘接種を行わせ、そして受けさせなさい。彼らの望みはこの世にしかないのです。

どうか全能の神を信じる我々に自然の道筋を変えるような罪深いことをさせないで下さい。神のみが命と死と健康と病気を届けることができるということを思い出しましょう。「神に従う人の救いは神のもとから来る。神は常に彼の側にいて、助け、救ってくれる。神は悪いことをする下手な術者の手から神を信じる人を救ってくれる」（詩編37.40.41）。

注

（1）小田泰子「人痘法についてのメートランド報告」『日本医史学雑誌』第四三巻第二号、二五五～二六九頁、平成九年六月号。

（2）古賀十二郎『西洋医学伝来史』四一九頁、日新書院、一九四四。

（3）Crookshank, M, Edgar: *History and Pathology of Vaccination*, p. 39, London, 1889.

（4）Massey, Edmond: *A Sermon against the Dangerous and Sinful Practice of Inoculation*, London, 1722.

（5）聖書の訳は日本聖書協会の新共同訳、一九九五年版によった。

（東北大学大学院　国際文化研究科　博士課程後期）